

オール木下牧子作品による 新しい日本歌曲の演奏会 シリーズ第5回

「立原道造をうたう」

太陽は空の中心にかかる

そこ
はよい見晴らしであつたから青空の一とこ
ろをくり抜いて人たちは血をつくり雲の
フライなどを料理し麵麭・果物の類を食べたのし
い食欲をみしたした日かげに大きな百合の花が咲
いてゐてその花粉と蜜は人たちの調味料だつた
さてこのささやかな食事の後できれいな草原に寝
ころぶと入の切り抜いたあとの空には白く晝間
の月があつた

立原 道造 『散歩詩集』より「食後」

©Tachihara Michizo Kinenkai 2007

2023年 5月28日(日) 午後2:00 開演 會津稽古堂

■主催 ARS NOVA ■後援 会津演奏家連盟 ■協力 立原道造記念会 / 軽井沢高原文庫

I. 古今東西の詩人と四季をめぐる

歌曲集 『抒情小曲集』 (1999年)

木下 牧子 作曲

- | | |
|-------------|--------------------|
| 1. うぐいす | 武鹿 悦子 |
| 2. ほんとに きれい | C.ロセッティ / 吉田 映子(訳) |
| 3. ねこぜんまい | 武鹿 悦子 |
| 4. 夕顔 | 金子 みすゞ |
| 5. すずしい日 | 岸田 衿子 |
| 6. しじみ蝶 | 新美 南吉 |
| 7. かぜとかざぐるま | 岸田 衿子 |
| 8. 山の枇杷 | 金子 みすゞ |
| 9. 月の角笛 | 新美 南吉 |
| 10. 秋 | 壺井 繁治 |
| 11. 白いもの | 北原 白秋 |
| 12. つらら | まど・みちお |

II. 立原道造をうたう

歌曲集 『太陽は空の中心にかかる』 (2015年)

木下 牧子 作曲

1. 食後
2. 永い午後に
3. もし鳥だったなら
4. ヴァカンス
5. 太陽は空の中心にかかる

1. 食後

そこ

はよい見晴らしであつたから青空の一とこ
ろをくり抜いて人たちは皿をつくり雲の
フライなどを料理し麵麩・果物の類を食べたのし
い食欲をみたした日かげに大きな百合の花が咲
いていてその花粉と蜜は人たちの調味料だつた
さてこのささやかな食事の後できれいな草原に寝
ころぶと人の切り抜いたあとの空には白く昼間
の月があつた

『散歩詩集』

2. 永い午後

永い午後

町のどこよりもここでは
太陽はやさしく人の肩を光らせ
とおい雲に
空のどこよりもここでは
風はしずかに時間とじやれて

散りしいた木の葉を焚けば
園丁の古い口笛に
秋のどこよりもここでは
煙はうつすら色づいて

『前期草稿詩篇』

3. もし鳥だつたなら

もし鳥だつたなら、ギリシャの柱のてっぺんで、朝日の歌をうたおう。橄欖オリブに包ま
れた神殿に隅まで明るい朝日、そのなかで死ぬまで心をはりつめて。

もし鳥だつたなら、そのとき青空に落ちて行くだろう。言葉にだけたよつてそんな
一生の終りにさえ自分は近くいるのだと、考えられるから。そうして鳥の形した雲に
なり、またあたらしい歌をうたおう。

もし鳥だつたなら、ああ、毎日に千の歌をかえてうたおう。朝日の歌を。朝日は翼
を磨いている、もう僕は後悔の鳥でない。ギリシャの柱に、きらきらする歌をうたお
う。

『前期草稿詩篇』

4. ヴァカンス

森のなかの小学校。浮雲が、空をすぎて行く、口笛を吹きながら、何かものを考え
ながら。

小学校の庭にぶらんこの下に、空っぽのかげが。日まわりが咲いている、ちようど
黄蜂やもんしろちようの日時計のように。

ふと、大きなもののかげり。おしろいの花が散る。

……それ程の短いひととき。

たのしいことがすぎて行く、浮き雲のように、みなはればれと。

5. 太陽は空の中心にかかる

『拾遺詩篇』

太陽は空の中心にかかる

秋である　すべては明るく熟した

風は皮膚につめたところよい

鳥は光りながら飛ぶ

私は橋の上に立つ

『下書と草稿詩篇』

ごあいさつ

ご来場いただきましてありがとうございます。本日は古今東西の詩人と季節をめぐる『抒情小曲集』、そして夭逝の詩人、建築家としても名を馳せた立原道造の詩による『太陽は空の中心にかかる』をお届けいたします。

少し立原道造の生涯を辿ってみます。道造は幼い頃より聡明で、小学校6年間で首席で通します。府立三中(現都立両国高校)では芥川龍之介以来の秀才と謳われ、パステル画には抜群の才能を示す一方、運動は大の苦手。一学期間休学するほど病弱で、夏は避暑のため奥多摩の御岳山で過ごしていました。19歳の冬には御岳での暮らしを題材にして、濃淡八色の絵の具と手漉きの和紙で一冊のみの『散歩詩集』を手作ります。(表紙を参照)

東京大学工学部建築学科に進学し、3年連続で辰野賞(建築学科の最優秀賞)を受賞。一年後輩の丹下健三が受賞できたのは、道造が卒業した後だといいます。「別荘を造らせれば日本一」との折り紙つきで石本建築事務所に入社。翌春には同僚のタイピスト水戸部アサイと互いを意識するようになり、5月には「風立ちぬ」の著作で知られる堀辰雄の山荘を二人で訪問します。6月に再びアサイを伴い軽井沢を訪れた際には信濃追分駅の近くでプロポーズ。順風満帆に思えたその矢先、肺炎カタル(肺結核の初期症状)と診断され休職を余儀なくされます。

ひと月ほどは信濃追分の油屋旅館で静養しますが、秋になると友人らの反対を押し切り、憑かれたかのように独り東北へ、そして九州へと旅立ちます。長崎で咯血、12月に東京に戻った時にはかなり衰弱した状態で、絶対安静を命じられます。中野の療養所で献身的なアサイの看護を受け容態はやや安定し、2月には第1回中原中也賞受賞の知らせを友人らと喜びます。3月には見舞いに訪れた友人に「五月のそよ風をゼリーにして持ってきて下さい」と美しい詩のような注文をします。しかしその一週間後の3月29日午前2時20分、付き添い人がいない間に病状が急変、24歳8ヶ月とあまりに短い生涯を閉じます。道造の命日は風信子(ヒアシンス)忌と呼ばれます。

道造の詩作に登場する「太陽」や「空」といった言葉は、生来病弱であった彼にとっては「生」の象徴であったように思えます。最も多感な青春期、19歳から24歳のまさにその「生」を光りながら駆け抜けた時間に紡いだ言葉は、木下牧子の音を纏い、静謐でありながら生命力に溢れるダイナミックな「うた」へと昇華していきます。

本日の演奏会にあたり、立原道造記念会の宮本則子会長より「歌い継がれることを希求していた立原道造にとっては喜ばしいことと存じます」との温かいお言葉をお添えいただき、軽井沢高原文庫のご協力により道造直筆の『散歩詩集』をプログラムの表紙に使わせていただきましたこと、心より感謝いたします。

プロフィール



うた 金子 堅治 東京生まれ。6歳よりピアノを学ぶ。父親の転勤に伴い会津に転居。会津高校在学中に声楽を藤村晃一、ピアノを秋月和子の両氏に師事。国立音楽大学声楽科に進み田島好一氏に師事。会津大学短期大学部社会福祉学科非常勤講師を経て、現在は自宅にて音楽教室を主宰。合唱の指導にも定評があり、2003年よりおおるりコーラスの指導を続けている。2018年にバロック作品によるソロ・リサイタル(チェンバロ/江川龍二氏)を開催し演奏活動を再開。2019年より『オール木下牧子作品による新しい日本歌曲の演奏会』のシリーズ展開を開始、今年でシリーズ第5回を迎える。また今春4月開校の福島県立会津農林高等学校校歌(詩/和合亮一氏)の作曲を手がけるなど幅広く活動。郡山女子大学短期大学部非常勤講師。



ピアノ 金子 理恵 埼玉生まれ。4歳よりピアノを学ぶ。東京家政大学附属中学・高校を経て玉川大学文学部英米文学科卒業。さらに同大学教育学部教育学科(幼児教育専攻)に学び、幼稚園教諭免許を取得。幼稚園勤務を経て、現在は自宅音楽教室にて幼児・児童への音楽指導を行うほか合唱伴奏を中心に活動。『オール木下牧子作品による新しい日本歌曲の演奏会』ではシリーズ全般にわたりピアノ伴奏を務める。

所属する『木の実シアター』では、幼稚園・保育園・福祉施設において20年の長きにわたり音楽ボランティアの活動を行なっている。